

# 六甲山のスケート場



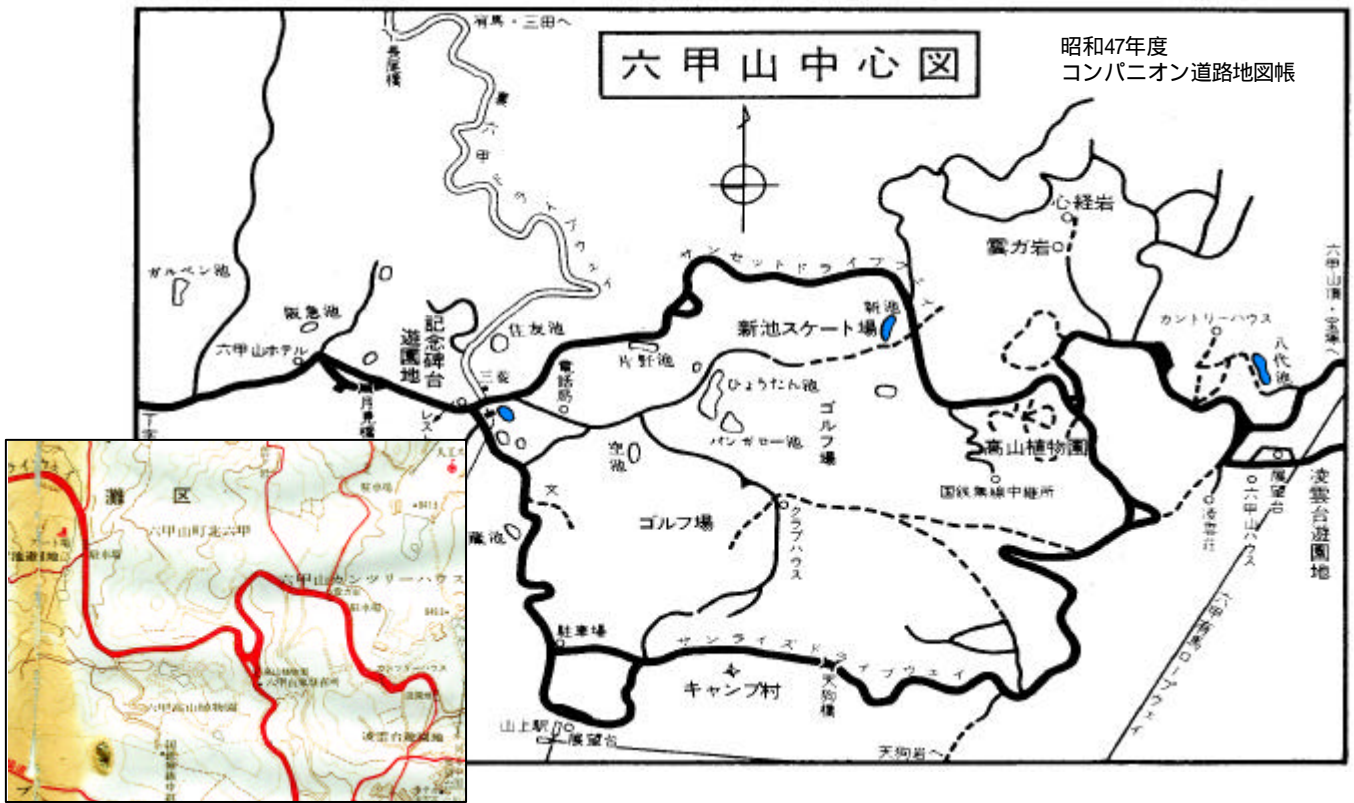
六甲山上では明治の頃より、天然氷を切り出すための“製氷池”(採氷池)が多く作られ、製氷(採氷)を“なりわい”とする人達で 冬の六甲山は活況を呈した。

天然氷を夏まで貯蔵しておくための“氷室”の地名が全国で多く残っているように、“製氷池”は多くの地域で存在したが、六甲山の天然氷は人が背負う等して下山しなければならなかった(その下山ルートが今もハイキング道として名を留める“アイスロード”であった)。そのため、昭和初期に冷凍機による製氷が可能になると、六甲山の製氷池は見捨てられた。

まもなく、六甲山上までケーブルが開通(昭和7年)すると、阪神電鉄(株)により、山上一帯の開発が進められ、天然スケート場もオープンした。製氷池は、小さく、水深も浅いため結氷し易く、スケート場への転用が容易であったため、天然スケート場として、六甲山の製氷池は生き返った。

最初にオープンしたのはケーブル山上駅に最も近い“つげ池スケート場”(記念碑台前の交差点角)でここは貸し靴もあった。続いて“新池スケート場”、“八代池スケート場”、“三国池スケート場”もオープンした。これ以外にも多くの製氷池がスケート場に生まれ変わり、六甲山では至る所でスケートができた。

またスケート大会も開催され、オリンピック選手の「稲田悦子」(昭和11年、12才でオリンピック出場)さんも出場して 冬の六甲山はたいそう賑わった。



左から「つげ池スケート場」「新池スケート場」「八代池スケート場」

昭和47年の地図には“新池スケート場”が記載されているが、昭和40年始めに既に利用できなくなっていた。昭和39年に「六甲山人工スキー場」がオープンしており、それを期にスケートは“袖にされた”ようで(この時点ではまだ暖冬の影響はなかった)、六甲山の製氷池は見捨てられた。

またその地図の右端にある“展望台(回る十国展望台)”、“凌雲荘”も今はない。凌雲荘(阪神電鉄系)の宿泊者はケーブル下駅で名前を告げると往復のケーブル乗車券が貰え、旅館に着くと、当日と翌日のスキー場入場券が貰えた。十国展望台の当初は入場時間に制限がある程に賑わった。六甲山にその賑わいが戻ることはもうない。

国土地理院 昭和49年の地図に基づく 昭文社「六甲山」の地図(左下)でも“新池”にのみスケート靴のマークがある。この新池の横に“新池遊園地”(現、オルゴールミュージアム)があったため最後まで存続したものと思われ、新池スケート場を最後に六甲山からスケート場が消えた。

1000万ドルの夜景



ホテル 凌雲荘 / 展望大食堂

(スケートリンク資料室)